

シンポジウム『自然免疫、その新展開』を開催しました



奥村 康 氏 光岡 知足 氏 審良 静男 氏 杣 源一郎 氏



日 時 2011年11月4日（金） 13:00～17:10

場 所 東商ホール（東京都千代田区丸の内3-2-2 東京商工会議所4階）

本年度のノーベル医学生理学賞は自然免疫分野の研究に決定されましたように、現在、自然免疫に対する注目が集まっています。この様な状況の中、免疫分野における最新の研究の動向を、自然免疫に焦点をあてて、わかりやすく紹介することが重要との認識の下、座長に免疫学全般に広い見識をお持ちの順天堂大学教授 奥村 康 氏、また、腸内細菌研究の世界的な第一人者の東京大学名誉教授 光岡 知足 氏、自然免疫研究の発展に多大な寄与をされている大阪大学教授 審良 静男 氏、本研究会会長の香川大学客員教授・徳島文理大学教授 杣 源一郎 氏にご講演をいただきました。

光岡氏は、「プロバイオティクスの歴史と進化」と題して、Metchnikoffの「不老長寿説」におけるヨーグルトの摂取から始まるプロバイオティクスからバイオジェニクスへの移行の歴史、生体恒常性維持機構の中で中心的な働きをしているマクロファージ系細胞や機能性食品の今後についてご講演をいただきました。



杣氏は、「パントエア・アグロメランスと免疫賦活作用」と題して、マクロファージの機能を適切に調節する物質である小麦共生グラム陰性細菌「パントエア・アグロメランス」の構成成分である糖脂質（IP-PA1）について、マクロファージのプライミングという新しい活性化段階の概念を含めて、これまでに得られた研究結果についてご講演いただきました。また、臨床試験や家畜のフィールド試験によって得られたエビデンスに基づいたIP-PA1を配合した製品や自然免疫制御技術研究組合設立の目的や経緯についてもご講演いただきました。



審良氏は、「新しい自然免疫学」と題して、自然免疫が再び注目されるきっかけとなったToll-like receptor (TLR) の発見の過程、10数個のTLRファミリーのシグナル伝達経路の解析、TLRを介しての自然免疫系の活性化が、獲得免疫の誘導に必須であり、従来の免疫理論の大幅な修正が求められていること、感染症、アレルギー疾患、癌免疫のみならず、動脈硬化、メタボリック症候群、自己免疫疾患の発症に関わっていることなど、自然免疫の最新の進歩についてご講演いただきました。

講演後のパネルディスカッションでは、来場者からの多数の質疑に対し、パネラーが答えながら、座長の巧みなさばきで、腸内細菌、免疫応答メカニズム、放射線被曝と自然免疫など、多岐にわたるキーワードをもとに、活発な議論が展開されました。特に、プロバイオティクスからバイオジェニクスへの移行や、自然免疫の制御におけるプライミングという新しいマクロファージの活性化段階の概念、自然免疫の異物識別分子機構について会場からも強い関心がありました。



当日は、食品関連企業や研究機関の研究に携わる方々など、270名以上の方にご参加いただき、自然免疫を含む「免疫」の新たな可能性に期待するという声を多数頂くことができました。本シンポジウムが自然免疫のリテラシーの形成に役立った手応えはアンケートからも伺えました。来年度も続いて開催を望む声が多く聞かれておりますので、関係者の皆様には、次回も何卒ご協力をお願い致します。また、ご支援・ご後援頂きました皆様はこの場を借りて御礼申し上げます。